

「葛藤裁判くキミのコトがダイスキだからボクは唄う」

作 中堂大嘉

【あらすじ】

ある女をストーカーする男がいた。男はどこか寂し気な彼女に惹かれ、気付いた時には彼女の行動を追うようになっていた。

ある女は人生に辟易していた。ストーカー行為に恐怖する日々を過ごし、これが原因でうつ病になってしまった。

葛藤する想いを抱えながら迎えた裁判。彼らはどこに向かうのか。

【登場人物】

近藤将 (28)

ニート

志田千里 (20)

フリーター

伊集院清人 (28)

千里の弁護士

松尾茂 (63)

裁判官

加藤すみれ (32)

証人



茂「それでは口答弁論やろうか、口答弁論。原告、前へ」

千里、前へ出る。

茂「原告の請求内容、主張の陳述……ああ、堅苦しい！ 君はなんで裁判を起こしたのかね？」

千里「私、原告は、被告による、ストーカー行為により」

茂「ああ、堅苦しい。あいつでいいよあいつ！ ストーカーしたやつなんかあいつで十分だ！」

千里「私は、あのクソヤローによるストーカー行為により、多大なる精神的ストレスを抱え、うつ病になってしまったため、あのクソヤローに死刑を求めろ」

茂・将「え？」

千里「私は、あのビチ糞ヤローによるストーカー行為により、多大なる精神的ストレスを抱え、うつ病になってしまったため、あのビチ糞ヤローに死刑を求めろ」

茂「あの、民事裁判で死刑は……」

千里「私は、あのドブ川ビチ糞ファツキンヤローによるストーカー行為により、多大なる精神的ストレスを抱え、うつ病になってしまったため、あのドブ川ビチ糞ファツキンヤローに死刑を求めろ」

呼吸が荒くなる千里。

茂「……民事裁判で死刑にはできないよ」

千里の背中を擦る清人。

清人「大丈夫？」

茂「こちらの書類によると……ストーカー被害により多大なストレスを受け、日常生活に支障をきたしたため、慰謝料1000万を請求すると書いているが……」

清人「はい、そちらで間違いありません」

千里「あんたのせい……全部あんたのせい！」

清人「抑えて！ 落ち着いて！」

将「そんな、ボクは、ボクはただキミのことが……」

茂「静粛に！ 静粛に！ 落ち着きなさい！ ウーイエー、裁判っぼくなってきたぜ。えー、確認だけど。原告はドブ川ビチ糞ファツキンヤローによるストーカー被害により」

将「ボクはドブ川ビチ糞ファツキンヤローじゃない」

茂「静粛に！ えー、原告はドブ川ビチ糞ファツキンヤローによるストーカー被害により、多大なストレスを受け日常生活に支障をきたしたため、慰謝料1000万円を請求する。

間違いはないね？」

清人「はい、間違いありません」

茂「私は原告に聞いているんだ。間違いはないかね？」

千里「……はい、間違いありません」

茂「えー、それでは被告、これに対して何か意見はあるかね？」

将「ボクは、ボクはストーカーなんてしていない……ボクは彼女が心配で、遠くから見守ってただけだ……ボクは彼女を守っていたんだ！」

千里「いつ頼んだ?! 守ってなんていつ頼んだ?」

将「そ、それは……」

茂「静粛に! 私の許可なく物を言うな!」

将・千里「……」

茂「えー、被告。彼女を守っていたとはどういうことかね?」

将「そのままだよ。ボクは彼女を守っていたんだ」

茂「詳しく聞こうか」

3.

将「ボクと彼女が初めて出会ったのは近所のスーパー。ボクは毎日そこで弁当を買うんだ。

どれを買うかが、唯一の楽しみだった」

千里、食材を探している。

将「んー、どれにしようかな……安定ののり弁か。いや待てよ、たまには幕の内弁当でも食べようかなー」

将と千里、目が合う。

将「この時、僕の胸の奥がこう、キューってなったんだ! その時ボクは思った! これが人を好きになるってことなんだって! LOVE&PEACEってこういうことなんだって!」

茂・清人「きも」

将「それからボクは生きる意味を見つけた! ボクは、ニートからスーパーヒーローに生まれ変わったんだ!」

将、自前の戦闘服に着替える。(マントを身に付けるなど)

清人「ニートだったのか」

茂「きも」

将「彼女が通る道に転がっている石を寄せたり、彼女の自転車に毎晩空気を入れたりするようになった。ボクは誰かのために生きるってこんなに幸せなんだって気づいたんだ!

LOVE&PEACEー」

茂「やば」

将「だからボクはストーカーなんかじゃない。ボクは彼女のヒーローなんだ」

茂「なるほどねえ。いやーきもいなあ、続いて弁護人の口答弁論。原告弁護人、前へ」

清人、前へ出る。

清人「ヒーローねえ……勘違いも甚だしい」

将、被告弁護人と書かれたハチマキを頭に付ける。

茂「おい、何をしている? 被告?」

将「ボクは被告じゃない! 被告弁護人のスーパーヒーローだ!」

茂「ああ、まあご自由に」

清人「……」

茂「原告弁護人の主張だよ、どーぞ」

清人「さっきから被告がおっしゃることは自分のストーカー行為を正当化しようとしているだけであって、原告のプライバシーを侵害しているのは明らかです。それに今回の裁判で一番重要なのは、原告がどれほどの精神的被害を受けたのかであって、被告の気持ちなどは全く関係する余地がない。よって慰謝料1000万円を請求します」

将「異議あり！ 彼は純粋に彼女のことが」

千里「異議あり！」

千里、清人を促す。

清人、とまどう。

清人「被告は、自分の汚い心を純粋という言葉を使い、我々をまどわそうとしている！」

茂「え？ そうなの？」

将「異議あり！ ボクは」

千里「異議あり！」

千里、清人を前へ出す。

清人とまどう。

清人「被告は、ボクなどという可愛らしい言葉を使い、自分が純粋であることを我々に主張しようとしている！」

将「異議あり！」

千里「異議あり！」

千里、清人を前へ出す。

清人、とまどう。

清人「被告は……その……あの……ブス！」

将（ヒーロー）「異議あり！ それは今の話に関係ないし、ボクはブスじゃない！」

茂「静粛に！ 確かにブスではあるが今の話に関係ない。原告弁護人、口を慎みなさい！

じゃあ改めてブスの意見を聞こうか」

将「ボクはブスじゃない」

茂「それは今、関係ない！ 意見を」

将「ボクは、彼は彼女に悪影響を与えていない！ あくまで彼女が喜ぶことをしているだけだ。慰謝料を払えって言うなら、ボクは一生かけても払う。だけど、ボクが彼女に悪影響を与えていたとは……絶対認めない！」

千里「よくそんなこと言えるね」

将「……本当に？」

千里「え？」

将「本当に、ボクのせいなの？」

清人「当たり前だろ！」

茂「静粛に！ 実際どのようなことがあったのか、証人に言ってもらおうか。それでは証人、前へ」

すみれ、寝ている。

茂「証人？」

すみれ、目を覚ます。

茂「出番だよ」

すみれ「ああ、出番出番」

すみれ、清人と目が合う。

茂「こちらの証人は、被告が通っているスーパーの従業員です。証人、被告はどのような様子でしたか？」

すみれ「……ああ、えーと」

茂「シャキッとせい！ いつまで寝ぼけてるんだ！ 裁判をなめるな！」

すみれ「ああ、えーと……私の名前は加藤すみれ32歳、結婚してます。だけど最近、夫が全然相手をしてくれません。私は昔から性欲が強くて」

茂「一体何の話をしているんだ！ 裁判をなめるな！」

清人「静粛に！」

茂・千里・将「え？」

清人「昔から性欲が強くて……その先は？」

茂・千里・将「……」

清人「ああ、私も昔から性欲が強くて、つい気になって……それで？」

すみれ「それで、私はスーパーのキュウリを見ては興奮する毎日に耐え切れなくなりまして。なんでよりによって野菜コーナーを担当することになったのか、本当に不運でした」

茂「今は何の時間なの？」

千里・将「さあ？」

すみれ「何度も何度も店長に移動希望を訴えたのですが、希望は叶わずキュウリと格闘する毎日でした」

清人「俺がキュウリになれば……俺がこれからキミの」

すみれ「そんな中、私の目の前にスーパーヒーローが現れたんです」

4.

千里、スーパーで買い物をしている。

千里、どのキュウリを買おうか迷っている。

将、千里の様子をものすごい形相で見ている。

千里、見られている意識はあるが気にしないようにしている。

すみれ「私ははじめ、彼が何を見ているのか見当もつきませんでした。だってとんでもない

顔をしてたから……私は、彼の目線を追ってみました」

千里「……そーねー」

将「なにがそーねーなんだ……何を考えているんだ？」

千里「あー、アー、んー」

将「んぐう、これはもしかしてよからぬことを考えているのでは……いかん、彼女にそんな

ことはさせない！ ボクが彼女を守るんだ！」

将「すいません！」

すみれ「はい！？」

将「このキュウリ全部ください！」

すみれ「ぜ、全部ですか？！」

将「はい！ 全部です！」

すみれ「か、かしこまりました！ ……この時、私はわかったのです。この人は私をキュウ

リの呪縛から救ってくれたのだと！ 一瞬だけでも私に救いを与えてくれたのだと！

見ず知らずの人を助ける人が、ストーカーなど行いますか？ 断言します。彼はストーカー

ーなんかじゃない！ スーパーヒーローです！ ……スーパーだけに」

千里「ふざけないで！ さつきから黙って聞いてれば、好き勝手に言いやがって。わたしは」

清人「本物のキュウリはどうかかな？」

すみれ「……え？」

清人「俺のキュウリはどうかかな？」

すみれ「でも、だめよ。私には旦那というキュウリがあるのに、そんな……」

清人「腐ったキュウリで満足できるのかい？ それにキュウリはこれからも毎日出荷され

てくる。このままスーパーのキュウリを見て悶々と過ごすの？」

すみれ「……それは」

清人「一番じゃなくていい、俺はキミの心の穴を埋める第二のキュウリになりたいんだ！」

すみれ「……本当にいいの？」

清人「ああ、構わない。同じキュウリじゃないか」

すみれ「……ここにも、ヒーローはいたんだね」

清人、すみれ、手を繋いでその場を去る。

茂「……いなくなっちゃったよ」

千里「ちょっと、どこ行くの」

千里、立ち上がり後を追おう。

将、千里の腕を掴む。

千里「触らないで！ どれいつもこいつもふざけやがって……あなた、自分が何をしたかわか

ってる？」

将「ボ、ボクは……ボクはキミを」

千里「自己満足もいい加減にして。ねえ聞いている？」

将「……」

茂「はい」

千里「おまえじゃねえ！」

茂「……」

千里「あんたの自己満足のせいで私はうつ病になっちゃったの？ わかる？ それともなに、私みたいな人間はうつ病になろうが構わないってこと？」

将「そ、そんなこと」

千里「あー、わかった。あんた、守ってる自分が好きなんでしょ？ 誰かを守ってる自分が

かっこいいんでしょ？ 違う？ ねえ？」

将「そんなことないよ！」

千里「じゃあ何なの！」

茂「せ、静粛に」

将、茂を制する。

将「そんなんじゃない……そんなじゃない。ボクは、キミのコトがダイスキなんだ……ただ、それだけなんだ……」

千里「……じゃあさっさと1000万払って私の前から消えて。お願いだから」

将「……昼、ハトに石を投げつける。夜、コンビニのアルバイトに行く」

千里「え？」

将「次の日の昼、またハトに石を投げつける」

千里「……」

将「コンビニのバイトの休憩中、君は外で空を見る……寂しそうな顔をして」

千里「だからなに？」

将「本当にボクのせい？ 本当にボクのせいでキミは」

千里「裁判官！ 今の言動からこいつのストーカー行為は明らかです！」

怯える茂。

千里「裁判官！」

茂「判決を下す！ ……原告の勝ち！ よって被告はなるべく早めに1000万を原告に

支払うように！ 以上、解散！」

千里・将「……」

茂「もういや」

茂、その場を去る。

千里「……何にもないの」

将「え？」

千里「何にもないのがつらいの」

将「……」

千里「でも、もう本当に何も無くなるから。わたしは」

将「……」

千里「ねえ、私のどこがいいの？ 顔？ 胸？ お尻？ そういう感じ？」

将「そんなんじゃない！」

千里「じゃあなんで？」

将「それは、その、言葉にするには……」

千里「私は生まれてこの方、人に愛されたことも人を愛したこともない、物事に興味や関心をあまり持たない女の子。社会がどうなるとか自分がどうしたいとか、そんなことわらない。そんなんだから毎日なにをしたらいいかわからず、暇を持て余しては、持て余した暇をまた持て余し、自分が生きている意味を考えては苦悩し考えては苦悩する毎日。苦悩しています。そんな中、私に興味を持つ男が現れました。他人に興味を持たない私だから他人に興味を持たれることがなかった私はどうしたらいいかわからず、その興味が大きくなるたび私に精神的ストレスを与えました……でも、なんだか嬉しかった……」

将「……」

千里「あー、なにやらどうにもよくわからない感情がどうにもよく分からなく私の中に渦巻いています。ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる……」

将、千里を抱き締める。

千里、将を突き飛ばし、その場を去る。

将「……」

千里を追う将。

5.

千里、ハトに石を投げている。

遠くで見守る将。

将は背中にギターを背負っている。

将、ハトに石を投げる。

将の方を向く千里。

千里に向かってピースする将。

将に石を投げる千里。

華麗に躲し、再びピースする将。

千里「……」

その場を去る千里。

将、その場でギターを弾きながら、曲を作っている。

千里、戻ってきて、将の様子を見ている。

ふと、千里の方を振り向く将。

隠れる千里。

再び曲作りを行う将。

顔を出す千里。

徐々にメロディが繋がっていく。

清人、すみれ、手を繋いで横切る。

曲を練習している将。

首吊り用のロープが垂れてくる。

ロープに手をかける千里。

千里「……」

激しく曲を歌う将。

思い留まる千里。

千里「あー、なにやらどうにもよくわからない感情がどうにもよく分からなく私の中に渦巻

いています。ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる……」

将「あのさ！」

千里「……」

将「す、す、す……好きだ！　ダイスキだ！」

千里「……へー」

将「へーって」

千里「……いいじゃん」

将「いい、じゃん？」

千里「いいんじゃない？」

将「それって、どういう」

千里「さあ」

その場を去る千里。

将「ちよ、ちよっと待って」

追いかける将。

おわり